Engler[5] は本マルバニッケイに極めて近似なシバニッケイ (*Cinnamomum Doederleinii* Eng.) が *C. Zeylanicum, β-parvifolium* Miq. を強く思出さしめると記しているが，マルバニッケイも亦確かにセイロンニッケイに近似な點を有する。又 *C. Cassia Bl.* の精油は Linalool を全く含有しないのが，特徴であるが，*C. Zeylanicum* Breyn. の葉油，皮油中には小量ながら *l*-Linalool を含有するのが特徴である。然るに本マルバニッケイの精油中には同樣 *l*-Linalool を多量に含有する。

著者は別報するが如く本マルバニッケイこそ現在に於ける *Cinnamomum* 屬の殘存母體であつて，*C. Zeylanicum* Breyn. の如きは我國に於けるニッケイ (*C. Loureirii* Nees) を經て，このものより分化したものと考えるものである。

なおこのツンナメ系の言葉は種子島へポルトガル船によつて鐵砲傳來(西歷 1543 年)と共にもたらされたものとも考えられない事もないが，著者はこの考えを否定する。

柳田氏[6]によれば種子島，七島寶島等にては蝸牛をマルバニッケイと全く同樣にツンナメと呼びこれはツグラメから變つたものと考えられているが 奄美大島ではチンニャマァ，チンニャマとなり，沖繩本島ではチンナン，チンナミ，チンナンモオとなる。

いづれも蝸牛に對する古い言葉の周邊的殘存と考えられるが，この事によつてもマルバニッケイの方言ツンナメは同樣に古く且つチンナンモオ系の發音からの變化である事が明かであつて，チンナンモオと Cinnamon との類似は特に著しいものと言う事が出來る。

このマルバニッケイの土名とカタツムリの土名との符合は眞の偶然であつてまた最も興味あるものと言える。(26. 3. 25) (通産省大阪工業試驗所精油研究室)

文献 1) Laufer: Sino-Iranica, : 542. (1919) 2) Matsumura: Index Plant. Japon., **2**, 2: 136 (1912); 松村: 植物名彙 和名: 103 (1916); 牧野. 根本: 日本植物總覽: 925 (1925); 364. (1931). 3) 藤田: 植研 **25**: 63 (1950). 4) 藤田: 植研 **26**: 47 (1951) 5) Engler in Engler. Bot. Jahrb. **6**: 57 (1885). 6) 柳田: 蝸牛考: 150 205 (1943).

○ Walker 博士訪日。ワシントン市スミソニアン研究所植物學部の Associate Curator である E. H. Walker 博士は，今夏琉球へ植物採集に行かれる途中日本へ立寄られた。6 月 6 日飛行機で羽田着，8 日に千葉縣茂原で採集，11, 12 日京都大學訪問，14 日沖繩へ向け出發された。その後沖繩本島，西表島，石垣島，與那國島で採集，9月 19 日再び東京へ戻られた。21 日より 25 日まで，山形縣鶴岡市で開かれた日本植物學會第 16 回大會に Botanical Society of America 及び National Academy of Sciences を代表して出席，琉球旅行談をされ，28 日羽田發歸國。なお同氏はヤブコウジ科の專門家で東大の腊葉を見て行かれた。